

旭川市旭山動物園の生活科での動物とのふれあいや 動物貸出の支援について

佐 賀 真 一

1 はじめに

旭川市旭山動物園（以下、旭山動物園）では、動物と直接ふれあうことができる唯一の施設、こども牧場（ペット・家畜種を飼育している施設）があります。普段からふれあいの時間を設け、たくさんの来園者に”いのち”の温かさや大切さを伝えています。

また、小学校1・2年生で学ぶ生活科では、こども牧場にいる動物に直接ふれあうからこそ感じる”いのち”を学んでもらいたく、学校と動物園が連携した授業の実践を展開しています。

2 生活科と旭山動物園

小学校は今年度から新学習指導要領が本格実施されました。今回の学習指導要領でも、「公共物や公共施設を利用する活動を通して」という記載もあることから、より一層生活科での動物園の活動が増えていくのではないかと考えています。

また、「動物を飼ったり植物を育てたりする活動」とも記載があり、その背景には「児童を取り巻く自然環境や社会環境の変化によって、日常生活の中で自然や生命と触れ合い、関わり合う機会は乏しくなっている」とあります。旭川市内の小学校（2015年当時 56校）へ 2015 年に行った調査では哺乳類を飼育している学校は5校だけになってしまいました。ただし、この回答した5校は、2015 年以降に旭山動物園の動物の貸出を利用していますので、2020 年現在は0校となります。この調査では最後に、「学校活動の範囲で動物の飼育活動に取り組むためには、どのような支援が必要だとお考えですか。（上位3つ選択）」という設問を設けましたが、やはり「飼育動物の貸出（小動物）（35校）」が一番多い意見としてあり、学校現場でも動物の貸出の支援は望んでいることがわかります（表1）。

表1 「学校活動の範囲で動物の飼育活動に取り組むためには、どのような支援が必要だとお考えですか（上位3つ選択）」という設問に対する回答。

①世話のしかたなど飼育に関わる各種相談への対応	31
②飼育している動物が病気になった時やケガをした時の治療	22
③学習プログラムづくりへの支援	15
④授業への講師の派遣	20
⑤教職員研修への講師の派遣	3
⑥鳥インフルエンザなど人獣共通感染症に関わる情報の提供	5
⑦飼育動物の提供・あっせん	5
⑧飼育動物の一時預かり	4
⑨飼育動物の引き取り	9
⑩飼育動物の貸出（小動物）	35
⑪その他	3

動物園の役割でもあり、この教科の目標である「生き物への親しみをもち、大切にしようとする」気持ちを子どもたちへ伝えるための体制を整えていかななくてはいけないと考え、学校との連携が不可欠であると考えています。

そこで旭山動物園では、生活科での利用を促進するために、動物とのふれあい（ペット種）活動やこども牧場にいる動物（ペット種）の貸出を行い、実際に児童が動物の飼育体験を行う活動など、“いのち”の大切さを伝えるのはもちろんのこと、動物の気持ちを考えて学校生活をおくることなど学校と連携を

しながら行っています。

3 2019 年の実績

2019 年の実績では、生活科で動物園を利用している旭川市内の小学校の件数は 41 件 33 校（旭川市内 53 校）で、7 校は 1 年生と 2 年生両方の学年での利用されており、約 6 割以上の学校が利用していることがわかります。

その中でも、動物の貸出を行っている小学校は 10 校あり、旭川市内の約 2 割の小学校が利用していることになります。旭山動物園ではこの動物の貸出の活動が、2014 年度から件数は増えてきている現状です（表 2）。

表2 過去 10 年の生活科における動物の貸出をした旭川市内小学校数の変移

2010 年	2011 年	2012 年	2013 年	2014 年	2015 年	2016 年	2017 年	2018 年	2019 年
6 校	6 校	8 校	6 校	14 校	10 校	9 校	9 校	11 校	10 校

4 旭山動物園に来園してのふれあい活動

学校の授業で動物園を利用される場合は、カイウサギやモルモットとのふれあいのみでふれあい方を学ぶもの、またはふれあいガイド（話が中心でふれあい＋エサ・うんちの標本をさわる体験も有り）を実施することで、命を直接感じてもらっています。体験した子どもたちの感想を聞くと、「かわいい」から始まり「ふわふわ、さらさら」や「気持ちいい」と手触りの感想。そして「あたたかい」という命に直接ふれることで感じる感想まで出てきます。そういったことから、ふれあいを行うことで教科書だけでは知ることができないことを知ることができると思います。

また、ふれあいをした動物から他の動物へ興味関心を示す子どもたちをおり、きっかけを与えることができます。そして、命の大切さをふれあうことで、動物が教えてくれるのではないかと考えています。

5 子どもたちの飼育活動～動物（モルモット）の貸出～

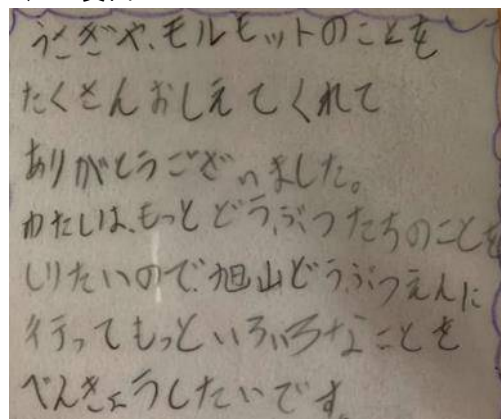


写真1 ふれあい後の感想

他の動物に興味をしていることがわかる

旭山動物園での動物の貸出はモルモットがほとんどになります。サイズ的に小さいことや感情が豊かであることから、子どもたちもモルモットの気持ちを考えながら飼育活動ができるのではないかとということでモルモットを推奨しています。

学校では、先に記述したように哺乳類の飼育動物が0校になったこともあり、「動物を飼ったり植物を育てたりする活動」に関して、サポートする体制を旭山動物園は作りました。ただし、動物（モルモット）の中・長期的な貸出には、学校・保護者・動物園の3者が連携をし、実施可能となります。

貸出を行っている学校を見てみると、動物園との関わりは1回では無く、動物園に来園したり、出前授業で学校を訪問したりと、少なくとも3回の関わりがあります。

基本的な流れは、動機付けの「ふれあい活動」（動物園または学校）→「モルモットを飼うために必要なことを調べ学習」（学校）→「調べ学習発表会」（学校）→「お別れ会」（動物園または学校）といったものになります。

動機付けのふれあいでは、「飼ってみたい」という言葉は、自然に子どもたちから出てきます。出てくるということは、動物たちへの興味・関心を持ったからだと考えています。

しかし、「かわいいから飼いたい」という気持ちだけでは飼うことができないということも伝え、「飼うためには何が必要か？」ということを投げかけ、子どもたち自身でとことん調べてもらいます。しかも色々な本などの情報から調べ上げていきます。

調べ学習が終わると、これで本当にモルモットが飼えるかどうか、動物園の教育活動担当者に向け発表します。動物園側からは、調べたものに対しアドバイスをしながら、子どもたちとたくさんを確認していきます。

そこでもっとも大事なことは、学校が休みである土・日・祝日をどうするかということです。「学校が休みでもモルモットはいます。誰かがお世話をしてくれなければ、モルモットは大変なことになるかもしれません。」と伝えます。本などには土・日のこと



写真2 児童の調べたものをまとめたもの
カテゴリー分けしわかりやすくまとめている



写真3 児童が発表している様子

班に分かれ必要なことを緊張しながら教育活動
担当者へ発表する

など書いていないので、子どもたちは悩んでいきます。「先生に任せる」という答えでは、動物を貸出しません。短い期間でも、子どもたちだけで飼育をすることで、“いのち”を感じてもらえると考えているからです。

結論として、学校へ当番を決めてくるや子どもの家に持ち帰る（最近では、学校の先生方の働き方改革により、子どもの家に持ち帰ることがほとんどです）などがあり、先生ではなく、子どもたち自身が飼育をするということが見えて、初めて飼育活動（モルモットの貸出）が始まります。

期間としては、中・長期的といいましたが、

2～3週間ぐらいが基本で、その後1ヶ月や2ヶ月など学習に合わせて期間を決めています。貸出期間終了時には、子どもたちがモルモットへの感謝の気持ちを伝えるお別れ会を行い、貸出期間で学んだことなどを伝えます。

そして、必ず写真や映像などで、自分たちがこの2週間で楽しかった思い出や自分自身がどのくらい成長したかななどをみんなで一緒に振り返ります。お別れ会の最中、子どもたちは別れるのがつらく泣く子どももたくさんいますが、その姿からは真剣に動物と向き合ってくれた証拠であり、関わった子どもたちは必ず命を大切にしてくれる子どもたちになると考えています。



写真4 お別れ会の様子

映像を見ながら2週間を振り返る

いのちをあずかるのは、すごくたいへん
たしなと、ナナちゃんといのちの大切さを
学びました。ありがとう。

写真6 子どものモルモットへのお礼の手紙1

いのちの大切さを学んだということが子どもの言葉として出てきた

また、「ナナ（モルモットの名前）の絵をかいて、先生にみせたら上手だよ！っていわれたよ！ナナがいなかったら、こんな絵をけなかったよ！」（写真7）という言葉もありました。モルモットが毎日いることによって、絵も上達したことや、自信を持ったことを伝えるものになりました。

さらに、「ナナが学校にいと、まい日の学校が楽しくなったよ」（写真8）という言



写真5 手紙を読む児童

楽しい思い出を泣きながらモルモットへ伝える

6 子どもたちの返却時の様子やその後

動物の返却時には、モルモットに対してのお礼の手紙や、私たち教育担当者に向けてのお礼の手紙など、子どもたち自身が考えたものをたくさんいただきます。

子どもたちからのモルモットへの手紙では、「いのちをあずかるのは、すごくたいへんだけど、ナナちゃん（モルモットの名前）からちゃんといのちの大切さを学びました」（写真6）という言葉がありました。毎日お世話やふれあいをすることで感じたことだと考えています。

葉もあり、”いのち”と毎日過ごすこと、動物がいたからこそ、気持ちが変わったのではないかと考えています。

また、モルモットを飼う前（学習前）と飼育して返却後数週間後に、モルモットの絵を子どもたちに描いてもらい、その絵からは様々なことが伺えます（写真9）。

子どもたちの絵を見ていただくと一目瞭然ですが、モルモットをしっかり観察していたことが伺えます。左の絵では、首やしっぽなど無いものが描かれていましたが、飼育後は、そういったものがなくなったモルモット

になりました。特に印象に残っている部分は、子どもたちなりに細かく描かれており、見ている側もどこに注目していたかがよくわかります。

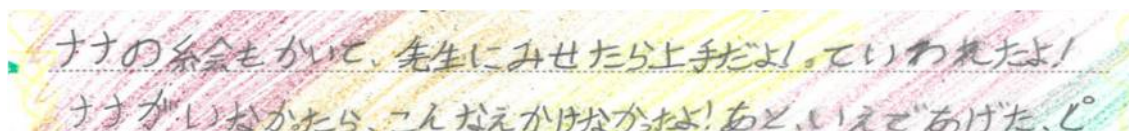


写真7 子どものモルモットへのお礼の手紙2

絵を先生に褒められうれしく思いモルモットのおかげであったことを伝える内容

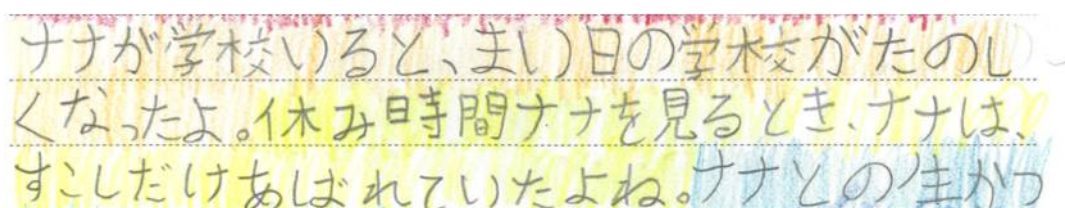


写真8 子どものモルモットへのお礼の手紙3

モルモットがいたことで学校毎日楽しくなったことを伝える内容



写真9 左:飼育前(学習前) 右:飼育後

毎日観察したり、ふれあったりすることなどの実体験をすることで絵も変わっていく。

このように授業後でもモルモットがしっかり心に残っていると考えられ、この生活科を通して学んだ飼育経験により、“いのち”を知ることができたと考えています。また、動物が学校にいるときは、その動物のことを考え学校生活を送っていました。この気持ちは他人を思いやることにもつながり、今後成長したときにとても大切になると考えています。

7 課題

課題としては、動物を貸し出しする学校は、毎年行っている学校もあれば、残念ながら1年限りで終わり、学校にまだまだ根付いていないという課題があります。過去10年を見ても、継続している学校はとても少ないことがわかります(表3)。先生方の異動もあるという現状もありますが、毎年モルモットが学校に来ていると、1年生が2年生になったとき「次は自分たちの番だ」という自立

心も芽生えてくるのではないかと考えているよう,教育委員会との連携も今後深めていきます.たくさんの子どもたちが飼育経験できなくてはならないと考えています.

表3 2010 年から 2019 年の間, 動物の貸出を利用した回数における小学校数.

貸出は 1 年に1回が基本となる. 10 回は 10 年連続となるが, 8 回以下は間があいている年もある.

貸出回数	10 回	8 回	6 回	5 回	4 回	3 回	2 回	1 回
学校数	1 校	2 校	2 校	2 校	2 校	7 校	3 校	5 校

旭川市内小学校の約 6 割が旭山動物園の動物とのふれあいや動物の貸出を利用しています. これを, 旭川市内の全小学校の子どもたちが小学 1 年生または 2 年生で必ず動物との関わりを毎年実施していくことを目指し, ”いのち” を知った子どもたちを育ていきたいと考えています.

(旭川市旭山動物園)